

令和二年度椽文芸大賞（散文部門最優秀賞を兼ねる）

大田原高等学校

大空を仰いで

昭和十六年五月 呉鎮守府

帝国海軍第三航空戦隊、通称「三航戦」の一角である航空母艦「鳳翔」は、建造中の戦艦「大和」を敵の諜報から守る傍ら軍港の洋上でのんびりと過ごしていた。航空母艦とは、略して空母と呼ばれる海に浮かぶ飛行場の役目を果たす軍艦である。操縦の腕が良い方から、第一航空戦隊から順に割り振られる。日本初の空母でありながら、目立つことの無かったこの船もその一つだった。そんな鳳翔の甲板上では、将兵たちが一機の零戦を取り囲んで群れをなしている。

「寂しくなるぜ」

「抜け駆けしやがって、羨ましい限りだ」

羨望の入り混じった野次が次々ととんでいた。満開を過ぎた桜の花びらが散り、甲板上に舞っていた。海は深い群青色で、日の光を受け、艦をほのかに青く染めている。一等飛行兵曹・槐重蔵は、肩を掴まれたり頭を小突かれたりと忙しかった。この青年は今まさに、南方作戦へ向かうとしているのだ。

戦地だ。青年らは、トラック島から南のラバウルに向かい、そこからソロモン海域へ出撃せよとのことだった。青空に舞い上がった青年の身に、予想外の事故が起きた。ニューブリテン島に着くまでは「赤道って、赤くないんだな」などと冗談を言っていたが、しばらくすると発動機に異変が起きた。徐々に仲間から遅れはじめる、高度も下がっていき、仲間が心配して近寄ってくれたが、どうなるものでもない。零戦は無縁が使えないため、隣の機に手信号を送った。

「我、一旦、戦線ヲ離脱ス」

だが、まだ問題はあった。離脱すると言っても、ここは既に戦闘空域である。いつ襲われるかわからない。ゆっくりと高度を下げながら、青年は腰に付けたお守りを握りしめた。零戦は防御が弱い。今、撃たれば、一巻の終わりである。しかし、驚くほど頭は冴えている。青年は少し機首を上げ、不時着体制に入った。操縦桿を握る手が震えている。海面はどんどん近づき、槐機は不時着した。やや衝撃が走り、操縦席に顔をぶつけた。額に鈍痛が走る。青年はライフジャケットを着こむと、海へ飛び込んだ。零戦は、頭を逆さに沈んでいた。その後、水上機を伴った駆逐艦に救助されたが、青年の顔は赤黒く腫れている。やたら首も痛い。軍医に見てもらおうと「君はお岩さんのようだ」との評をもらい、そのまま内地へ呼び戻された。今思えば、大した怪我ではなかった。全治二ヶ月のあの顔で、痛めた首をすばめて上官に会ったのが功を奏したらしい。

昭和十八年一月、松島飛行場。ソロモンからの転勤後、青年は松島海軍航空隊に配属されていた。階級も士官へ昇級したが、下士官からの叩き上げであり、「特務少尉」と呼ばれた。松島での日々はすぐに終わりを告げることになる。地元という理由で、志願者数名と、宇都宮陸軍飛行学校隣接の清原飛行場及び、宇都宮航空廠に短期派遣されたのだ。航空廠とは、航空機の保管、製造、研究が行われる施設である。この異動は青年をとて喜ばせた。彼は元々、陸軍の金丸原教育隊、陸軍航空士官学校で初等教育を受けた後に陸軍を蹴り、海軍の筑波航空隊へ再入隊。訓練を受け、空母「鳳翔」の搭乗員となった。故に、用途や航法が多少異なる陸海軍機の両方を操ることができるのだ。

「皆様に負けぬよう、精一杯戦って参ります」

顔に朝日を受け、少しはかんで挨拶をする、艦内に拍手が沸き起こった。口笛を吹く者や、肩を組み軍歌を口ずさむ者もいる。次の瞬間には、もう零戦のプロペラは回り始めていた。整備兵たちが、最後の整備を終えたのだ。これから共に戦うであろう愛機も、日輪を翼に映してキラキラと光を放っている。その機体には、彼の家紋をあしらった沢瀉も描かれていた。青年を乗せた零戦は、静かに発艦を果たした。青年は青空の中、敬礼をしながら鳳翔の上を一、二周旋回した。甲板上では艦長以下多くの将兵が帽振れをしている。青年はもう一度大きく旋回すると、その場を後にした。槐機は見る見るうちに小さくなり、水平線の彼方へと消えていった。

昭和十七年九月、南洋庁トラック泊地。青年はトラック島へ配属されるも、戦局は崩れ始めていた。戦死者も増え、航空隊には不穏な空気が満ちていた。青年の脳裏に、残してきた家族の顔が浮かんだ。彼は自分の荷物の中から親指ほどのお守りを取り出した。これは、彼が出征する際に妻から贈られた物だ。紫の生地に「武運長久」の金刺繍が施されている。青年は、それを自分の飛行服の腰に括り付けた。先の見えない不安は、恐怖へと変わりつつあった。

それからしばらくの間は、泊地に泊まる軍艦を同期たちと見に行った。演習を行っている艦隊は勇ましかった。そんなある日、青年は突然、上官に呼び出された。海軍制服に身を包んだ青年が指令室へ入ると、渋い顔の飛行隊長から、一枚の紙を渡された。

「俺からは通達のみだ。槐一飛曹には、もう少し、ここに残ってもらおう。なんせ、未だ航空隊の再編が間に合わないのだ」

「承知しました」

トラック泊地は、緑が美しい島だ。島には旅館があり、青年はそこに泊っていた。同宿の仲間たちとは兄弟のように仲がよかった。訓練の間には、青いバナナ林や、全裸で暮らす島民に目を白黒させたものだ。任務といえば、艦隊護衛や泊地上空の哨戒のみである。そんなある日のこと、飛行兵曹長となった青年に出撃命令が下った。海域は、日米多くの艦船や航空機が沈んだことから「鉄底海峡」と呼ばれた激

三日後、青年ら数名は夜間戦闘機「月光」に乗り、栃木へ向かった。降り立ったのは、金丸原飛行場である。そこで基本的な陸軍機の扱いを学び、教官教育を受けた。青年は、教官教育だけで済んだ為、少しの休暇を与えられた。士官用外套を羽織った彼は、飛行服に軍刀をぶら下げたまま、家族の待つ家へと向かった。乗り込んだ列車の中には、老人やセーラー服姿の女学生など、思いの外人が多かった。まだ、戦争の影は内地まで届いてないらしい。車掌や数名の女学生が、「御国の為にご苦労様です」と青年に頭を下げた。皆、飛行兵が珍しいようで、青年に好奇の眼差しを向けていた。列車を降りると、大田原の街には雪が降っていた。彼は最初、久々に家族に会える為胸が高鳴っていたが、家が近づくに連れて緊張に変わっていった。娘たちは、自分が誰だか分かるだろうか。妻は、どんな顔をするだろう。粉雪の中、白い息を吐きながら家路を歩き、到着した。懐かしの我が家である。「槐」の表札がかけられた家は、出征前と何ら変わらないように見えた。覚悟を決め、青年は戸に手をかけた。今、開けようとするその時である。

「あの、どちら様でしょうか」

背後から、聞きなれた声があった。その声は微かに震えていた。振り向くと、強張った表情の妻が立っていた。その目は、青年の腰に下げた軍刀一点を見つめ、明らかに警戒していた。だが、彼の顔を一目見るなり、表情が和らぐのが分かった。

青年の心配に反して、家庭内は至って平和であった。制限はされるものの、特に不自由はないという。一つ変化があったのは、最後に顔を見た時にはまだ赤ん坊だった次女が、かなり成長していたことだ。

「お便りがありませんでしたが、どちらへ行っていましたか」

台所からとんできた妻の質問に、青年は内心ギクリとした。南方で見たことは口にしてはならぬと、上層部に釘を刺されている。しかし、青年が見た限り、戦局は悪化している。本当のことを言うべきか。青年は、心の中で頭を抱えた。二人の娘は、青年の着流しの裾を、無邪気に引っ張っている。

「筑波と、呉と、松島だよ。これから、清原へ向かうんだ」

本当のことは言えなかった。内地のみの勤務だと分かると、妻は少

しホツとしたようだった。

「あなたには、娘たちもいるんですから、あまり危険な所へは行かないで下さいね」

何も知らない娘たちは、今度は庭で遊びたいと言い始めた。青年は、娘に手を引かれて庭へ出た。娘とは、毎日のようにお手玉や絵を描いて遊んだ。幸せだった。

そんな幸せも東の間に数日後、青年は再び戦地へ向かう。その前日、妻に自分の軍刀を手渡した。彼は、ずっと無意識に考えていることがあった。自らの死の可能性と、残していく家族のことである。

「これから、何が起こるか分からない。念の為、これを渡しておくよ」
「よろしいんですか。頂いてしまつて」

「差支えない。もう一振りある。これは尉官になる前、使っていたものだ。本当に、次は生きて会う保証はできない。こんな言い方はしたくないが、俺の形見だと思つてくれ」

そう言い残すと、青年は家族に手を振り、我が家を後にした。

清原飛行場は、広大な航空基地だった。飛行学校の学生や、出撃する部隊も使用していた。青年らの仕事は、洋上航法の指導と航空廠での試験飛行である。陸軍で教育を受けた時には地文航法のみだったので、青年は疑問を抱いたが、その理由はすぐに分かった。連日、陸軍航空隊がラバウルへ出撃しているのだ。陸軍の手を借りねばならぬ程、戦局は悪いのだろう。青年は何とも言い難い暗い気持ちになったが、教官としての仕事はとても楽しかった。六人程の学生の前で大声で号令を掛け、教えるのだ。青年は、自分の知識経験を余すところなく活用した。敵を討つことも勿論だが、教え子たちが撃たれないことを重要視した。陸軍航空隊は、海軍に比べ、比較的搭乗員のことを考えていたと思う。飛行機にも防弾が施されていた。だが、すぐに自爆を命じる点は、海軍と同じである。着任当初は陸軍の雰囲気大いに戸惑った。彼らは青年のことを「少尉殿」と呼ぶので、響きが居心地悪く感じた。また、陸軍航空隊は自分たちを「空軍」と称し、基本的に体罰を禁止していた。「空軍の若鷲」を育む場として、体罰を禁止したのである。この風潮は、青年も賛成だ。元々、あまり暴力を好む人物で

学校は、一つの実戦用の部隊に再編成され、宇飛校の面影は消えていました。槐少尉は、第一小隊の小隊長でした。私はその列機です。彼は陸海軍どちらの航空隊にも詳しく、経験も知識も豊富な方でした。以前は、月光に乗っていたそうですが、教官機には不向きとのことでした。たまに連絡飛行で彼の愛機を見ますが、機体に沢瀉を描いていましたよ。沢瀉は矢尻に似ていることから、武運長久の象徴だそうです。お願いすると、私たち練習生の機にも描いてくれました。周りからは「沢瀉隊」と私たちは呼ばれていましたね。誰よりも教え子のことを考えてくれる槐教官に、皆とても懐いていました。声が大きく気さくな方という印象です。私の戦争の象徴は、ある戦いでした。「捷号作戦」です。フィリピン、南西諸島、日本本土を防衛すべく決戦です。それぞれ捷一号から捷四号までの総称を、捷号作戦と呼びました。私は壬生を離れ、比島（フィリピン）へ向かいました。ルソン島にあるクラーク基地では、陸海軍混合の航空隊が大勢集められていました。そこでの私たちの任務は囃です。主力艦隊を無事に戦場へ突入させ、他の部隊が敵を攻撃する為の時間稼ぎです。何とも言えない気持ちでした。初の実戦が囃ですから。しかし、訓練には真面目に取り組みました。作戦発令前夜、搭乗員は全員クラーク基地に集合しました。指揮官からの訓話でした。

「諸君らも知つての通り、今日日本は未曾有の危機である。明日の一戦で、皇国の興廃が決まるのだ。ルソン島の陸軍、レイテ湾の海軍、そして諸君ら、帝国空軍の総力を合わせ、勝利を勝ち取りたい」

私はその時、槐少尉を見た気がしたのですが、今となつては分かりません。翌朝、計百五十機程が出撃です。零戦・疾風多くの航空隊が飛び立ちました。私も、北へ向かいます。エンガノ岬に味方の空母が見えました。しかし、艦載機が異常に少なかったのが印象的でした。私は、自分が囃であることを思い出しました。敵の攻撃は恐ろしいものです。数隻の空母に、大量の爆撃機が蠅のように群がるのです。多勢に無勢でした。私が守っていたのが、どうやら旗艦「瑞鶴」だったようです。軽空母を沈めた敵は、今度はこちらに襲い掛かりました。何があだか分からない中で、日の丸が墜ちていくのが見えます。まさ

はない。何よりも驚いたのは、士官と兵が同じ釜の飯を食べていたことである。海軍での階級差別は目も当てられなかった為、仲間たちと、冗談を言いながらの夕食は好ましかった。食事も、一般人と比べると非常に豪華である。カレーやカツレツなどの洋食や、フレンチトーストや羊羹を始めとするデザートまでもが食卓に並んだ。

清原での生活は多忙である。まずは教官任務。ラバウルへ出撃予定の学生に、洋上航法を教える。かつては自身も飛んだ「ラバウル」の響きに、嫌な予感がした。青年は、自分が担当の偵察隊の教え子たちができる限り丁寧に教えるように思った。慣れない洋上への恐怖心を拭い去ることから始め、最後には遠征で横須賀の海を立川九九式高練で飛ぶことに成功したのだ。当時は疎かにされていたパラシュートの重要性、フカへの対処法など、自分の経験をひたすら説いた。また、「左捻り込み」や「錐揉み」などの特殊飛行も教えた。第一号の偵察隊九名は、百式司令部偵察機を改造空母に載せ、ラバウルへ飛び立った。教官任務を終えた後は、練習機「赤トンボ」で中島飛行場（宇都宮南飛行場）へ向かう。そこで受け取った、陸軍を代表する名機「一式戦」を再び清原へ空輸しテストフライト。そのまま航空廠へ納入する。やがて、大東亜決戦機と呼び声の高い四式戦「疾風」も量産され、納入されるようになった。この航空廠は本土で五つの指に入る兵器庫らしい。事実、清原には三式戦「飛燕」、百式重爆「呑龍」、三式指揮連絡機を始め大多数の陸軍機があり、零戦や一式陸攻、彗星艦爆などの海軍機も扱っていた。この頃の青年は横須賀や岐阜などへ連絡飛行を頻繁にしていたが、悪天候の日の飛行は恐ろしく、生きた心地がしなかった。これから終戦まで、この連絡飛行とは付き合うことになる。

実に充実した約一年半の松島・清原での勤務だった。だが、やがて青年にも戦局悪化の影は伸びてくるのだ。だが、やがて青年「サイパン島玉砕。南方ニオケル『あ号作戦』破綻セリ。次イデ、捷号作戦ヲ発令ス」

『私が槐少尉と初めてお会いしたのは、壬生教育隊での訓練でした。あなたほどの年だった私は、少年飛行兵でした。戦局悪化に伴い飛行

に地獄でした。すると、後方に援軍が見えます。その中の一機に、沢瀉が描かれていました。あれが、槐機だったのかは分かりません。しかし、私としては非常に心強かった。沢瀉に助けられて、遂に帰ることができました。その後、私は戦友会にも所属せず、槐少尉と会うことはありませんでした』

昭和十九年六月 比島

絶対国防衛圏が失われた報せが入った直後、航空隊の再編成が行われた。どうやら、「捷号作戦」に伴うものらしい。陸海軍の混合航空隊が多く生まれ、次々と出撃していった。青年は呉を離れ、上手く宇都宮へ逃げたが、既に遅かった。清原飛行場に白城子陸軍飛行学校が移動し、宇都宮教導航空隊と再編されたのだ。拠点を失った宇都宮飛行学校は教育を他校へと移し、消滅した。これにはさすがの青年も参った。結局、彼も「予備機動部隊」として比島へ送られてしまったのだ。しかし、クラーク基地は空襲で壊滅。内地へ帰還し、再び転々とする彼に恐れていた事が起きた。あれは、突然の教官集合命令のことだ。「良いか、これより敵へ必殺の特別攻撃を行う。貴様らはそれぞれ、小隊の中から優秀な者を選ぶように。勿論、貴様らからも、志願者を募ることとする」

「必殺の特別攻撃」とは、特攻のことだ。飛行兵を鉄砲の弾のように使い捨てようというのだ。それも、友や家族のいる未来ある若者たちだ。青年の志気は、どん底まで落ちていた。報告書に、こんな作戦は無理だと訴える教官もいた。皆、南方で戦い、何百という敵を目にしてきた男たちだった。しかし、そんな声は歴史の波に消されていく。「貴様、それでも帝国空軍の軍人であるか」

そう一喝されて終わった。軍上層部は、一人の若者が死ぬことで、悲しむ人々のことを考えることができなかったのだ。

昭和二十年二月、内地。特攻命令が迫ってくるのを感じて、数名の練習生と共に部隊を変えた。本土上空を守る「制号作戦」に協力することになり、関東海軍航空隊に配属された。帝都防衛という題目で、関東の飛行場を転々としたが、沖縄戦の「天号作戦」発令時に、宇都

宮へ呼び戻された。教導航空隊を統括していた第六航空軍が、連合艦隊の傘下に入ったのである。青年も陸軍に統合され、支援にまわった。宇都宮教導航空隊は、第六教導航空隊と改められた。宇都宮にも、頻繁にP51やグラマンF6Fなどの新鋭機護衛のB29が超高度で来襲し、街を襲った。青年の出撃回数は、増える一方だった。

「東部軍情報。敵機、ハゴイより北上、宇都宮上空を旋回中なり。目標は宇都宮の模様。宇都宮の皆さん、頑張ってください」

七月のある日、例のごとく空襲警報が鳴った。どうやら、敵の爆撃隊がテニアン飛行場より接近中とのことだ。今回の目標は宇都宮だとされた。青年は空を仰いだ。黒雲が天を覆い、さらにその向こうには、豆粒のような点が多量確認できる。しかし、中々出撃命令は出ない。このままでは、宇都宮が火の海になる。青年の中で、焦りが生まれた。案の定、B29が中島飛行機製作所へ向けて空襲を開始したようだ。司令部は慌てて出撃を命令。青年らは、飛行機へ走った。だが困ったことに、青年の疾風は修理中である。整備兵に相談すると、慌ただしく零戦が運ばれてきた。

「第一迎撃隊出撃。並びに、第二迎撃隊も全機出撃せよ」

六十機程の迎撃機が、大空に上がった。青年の目には、漆黒の空の下で、懐かしき街が火の海に変わる様子が映る。高射砲の音も聞こえたが、もはや焼け石に水である。すると、数機のグラマンが低空へ降りて来るや否や、逃げ惑う人々を銃撃したのだ。青年の中で何かが弾けた。すぐさま小隊を連れ、グラマンに突っ込んだ。彼は、怒りで燃えていた。敵は気づき、急降下で向かってきた。一機のグラマンに背後を突かれた青年は、機体を傾けた後、機を捻った。帝国航空隊の秘技「左捻り込み」を、彼は会得していた。背後につき機銃を撃つと、グラマンは火を噴いて墜ちていった。残りは上空へ逃げたが、彼は追った。グラマンと同じ高度では戦えないことなど忘れて、飛び続けた。計器の数値もみるみる上がる。高く、高く上昇する。頭が割れるようなGで耳鳴りがし、発動機が悲鳴を上げている。それでも彼は追い続けたが、やがて零戦は力尽き、戻るより他はなかった。

とだ。青年は、列機の教官と迎撃を任された。九月を目安に訓練を終え、九州へ戻れと言われた。若き練習生たちは、初の愛機である二式戦にとっても喜んでいようだ。そんな彼らを死なせたくなかった。福島の飛行場に着くと、青年は改めて事の重大さを思い知った。大田原で彼の帰りを待つ、家族のことだ。彼は国のことを考え、家族のことを想った。しかし、教え子や他の小隊の前では、極力明るく振舞った。夜の飛行場は静かだ。月明りの下、バラバラと夜の海には赤トンボが見える。毎日、漁船や海軍の駆逐艦に急降下訓練をしている。だが、やがて訓練は空襲の中止となった。迎撃の機会はない。来る本土決戦「決号作戦」を睨み、航空機を温存した為だ。八月九日頃、洋上の軍艦から、対空戦闘用意の喇叭が聞こえた。艦載機が多数飛来したのだ。あの数では太刀打ちできない。不調も多い。もう、飛行機さえまともに飛ばなくなっていたのだ。結局は空襲で、飛行場は壊滅したのだ。残っているのは、青年の疾風と赤トンボを含め数機のみだ。

「俺の軍刀を持ってこい。お前らは、もう退避しろ。特攻は俺だけで十分だ。特大の空母を沈めてやる。心配せずとも、この先、お前らはこの国に必要な存在になるよ」

彼は、教え子に自身のことだけ考えるよう命じた。「武運長久」の字が消えかけたお守りを握り、長らく共にした疾風の操縦席が、いつもと違うように感じた。家族には申し訳なく思った反面、自分が死ぬことで、国を守ることができるならいいとも考えていた。しかし、自分は絶対に死なないとの反抗心もあった。それは確信に近く、ある種の誓いでもあった。そして、その日が来ることは遂になかった。八月十五日、快晴の空の下、玉音放送が流れた。終戦したのだ。幸い、特攻するはずだった教え子は無事である。その後、早速武装解除が行われる。軍刀が回収され、まだ稼働状態の航空機はプロペラと機銃を降ろした。青年は、すっかり牙の抜かれた愛機の体を撫でてみた。幾つか弾痕があり、日の丸も沢瀉も剥けかけていた。「解散」の号令が掛けられ、航空隊は解散したのだ。もう槐重蔵は青年ではない。齢三十の、大人の男になっていたのだ。大田原では、家族が彼の帰りを待っていることだろう。青年は、最後に天を仰いだ。大空には、水平線の彼方

「俺はグラマン「ヘルキャット」に乗って、ナカジマを攻撃していた。あれは、俺たちが爆撃を始めた頃だったと思う。数機のフランク（疾風）が、俺たちに突っ込んできた。俺はフランクをかわしたが、その時に何かおかしいと思ったんだ。

「おい、何かおかしくないか。奴は本当にフランクか」

「ゼロワン（隼）と見間違えたんじゃないのか。アイツ、機体にベクトルを描いてるぜ」

その時、ある一人の古株が口を開いた。

「アイツはフランクじゃない。ゼロだ」

ゼロ。オスカー（隼）と共に、我が軍を長年苦しめた悪魔だ。だが、もう俺たちの敵じゃない。グラマンは素晴らしい飛行機だ。後ろから、あの矢印のような植物を蜂の巣にしてやる。

待てという古株の制止を振り切り、俺たちはゼロの後をつけ、機銃を撃った。それがいけなかった。弾は奴を避けるように当たらない。

俺は本当に悪魔と戦っているような気分だった。さらに次の瞬間、ゼロが視界から消えたんだ。驚く間もなく、列機が火を噴いた。勝てない判断し、俺ともう一機は、先を争うように上昇した。だが奴は追ってきた。雷のような、ドラム缶を叩いたような音がした。撃たれたんだ。幸いにも致命傷には至らなかったが、その時、初めて気づいた。ゼロは機体を傾けてわざと自分を撃たせ、俺たちの隙を狙ったんだ。キョハラに、まだそんな力が残っていたとは。あのパイロットは何者だったのだろう」

計二回の迎撃での戦果は、今ひとつだった。零戦に乗ったのは、これで最後である。県都は遺体の焼ける臭いと共に、焦土と化していた。自分たちのしていることは、戦争なのだ。人が死ぬのだ。かつて、空に夢見た青年は、戦争の現実を突きつけられた。彼は涙を堪え、威張った顔で焼け野原を歩いた。このような光景は、決して珍しくない。この時日本は、悲しみで溢れていた。

昭和二十年七月。槐隊は、九州へ呼び出された。古参の彼も、特攻へ飛び立つのだ。それぞれ愛機を受け取り、福島で訓練をせよとのこ

に、雲の峰が一つ浮かんでいた。

青年の長きに渡る戦いは、これで終わりで。戦後七十五年、僕がこの青年、亡き曾祖父の軍歴を調べ始めたきっかけは、百田尚樹氏の「永遠の0」だった。僕は幼い頃から、曾祖父は戦闘機に乗って、アメリカと戦争をしていたんだとよく聞かされたものである。今となっては、誰から聞いたのかも臆気だが、僕の中では当たり前のこととなっていた。これは、そんな彼をモデルにした物語だ。僕はよく、彼に似ていると言われた。彼はとても頭のいい人だったそうだ。僕の通う高校の前身である旧制中学で大学進学を目指していたが、経済的余裕はなく、陸軍少年飛行兵・海軍予科練を受験し双方に合格。二十歳前後に入隊したという。それと同時に曾祖母と結婚していた。彼らは遠い親戚で、子供の頃から、曾祖父はよく家に遊びに来ていたという。曾祖母は彼に懐いていたそうだ。跡取りのいなかった高祖父は、親戚に縁談を持ち掛け、曾祖父に白羽の矢が立ったというわけだ。戦争について何も知らない僕は、戦友会の記念誌などの資料を、苦労しながら読み漁る。日本史の教科書から曾祖父の気持ちは読み取れないが、戦場で書かれた生きた言葉から、曾祖父たちの気持ちに少し近づけた気がした。一人一人が、大切な人が帰りを待っている男たちである。

戦局が悪化した十八年からは、海軍のみならず陸軍にも度々派遣され、全国を転々とし、福島県内の飛行場で終戦を迎えた。実に、十代から三十歳までの人生最高の時間を戦争に捧げたのだ。兵籍簿焼失の為、終戦時に陸海軍どちらに本籍を置いていたかの詳細は不明のまま。復員後は、全日空と空自からパイロットのスカウトを受けるも、妻に猛反対され辞退。戦闘機の操縦桿をトラクターのハンドルに持ち替え、家族を養う傍ら自治会長を務めた。曾祖父は真面目で、情け深い人物だったという。晩年には、「市長選に出る」と言いながら亡くなったそう。それも、周囲の候補者に恐れられる支持率だったという。曾祖父の人望の表れだろう。彼は戦友会と共に、かつての仲間たちと石碑を建て、戦争の悲劇を繰り返さぬよう訴えた。ここまで調べ、彼が壮絶な時代に生まれたことを痛感する。平和に感謝すると共に

に、平和の礎となった彼にも感謝せねばならない。曾祖父が最後に飛び立った飛行場。僕は一度、行ってみたかったが、それは無理な話だった。現在、有力候補地の飛行場跡には、福島第一原発が構えている。他の候補地も、太陽光発電所や、田園になっている。今はもう跡形もないだろう。月日は流れ、孫も生まれた。温かい縁側で平和な空を眺めながら、曾祖父はまだ幼い孫の頭を撫でながら話したという。「爺ちゃんね、昔飛行機に乗ってアメリカと戦争をしていたんだよ。それから、飛行機を教えたんだ。校長先生みたいに皆の前で、大きな声で教えていたんだよ」

頭の禿げた小柄な老人は、まるで二十代の青年のように語るのだった。彼は、毎日のように話して聞かせたという。戦争体験を語るのを拒む人もいる中、彼はむしろ真逆だった。彼にとつての「青春」は、大空の戦争にしかなかったのだ。母は昔、曾祖父に一つの歌を教えてもらったという。「同期の桜」という軍歌だ。「貴様と俺とは、同期の桜。同じ航空隊の庭に咲く」というフレーズから始まり、戦友に捧げる歌だ。「鳳翔」から飛び立つ時も、教え子を見送るときも、国の空の盾となる時もそして、亡き戦友への碑を建てた時にも歌った歌だそう。それを歌う彼は、どんな気持ちだったのだろうか。きっと、将来への希望や家族への愛を、大空に託したのだろう。自分も負けないくらいに力強く生きてゆきたい。空を仰ぐと、そこには、かつて曾祖父たちの守った空が、どこまでも続いていた。

参考文献

- 「永遠の0」百田尚樹著 講談社
- 「青空に飛ぶ」鴻上尚史著 講談社
- 「少年H」妹尾河童著 講談社
- 「思い出の金丸原」金丸原飛行会
- 「壬生特操会五十年記念誌」壬生特操会
- 「蒼空の青春」栃木県少飛会
- 「那須の太平洋戦争」北那須郷土史研究会
- 「宇都宮大空襲米軍資料・作戦書」

詩部門 最優秀賞

砂糖

小山城南高等学校

人生は甘い方がいい

それは果たして、だれの言葉だろうか
それは、本当の甘さを知らないひとの言葉だ
苦みなんて味わったことのないひとの言葉だ
でも、皆はそんなひとに憧れを抱く

だって、かれらは甘い顔をしているから
かれらの言葉には、甘さが詰まっているから

ひとびとは皆、その甘さに溺れたいと願う
だがそれは、まやかしの甘さに過ぎない
本当の甘さは、沢山の苦味の中にある

ほんのひとつまみの、お砂糖だ

- 「子供たちへ伝える戦争」講談社
- 「壬生町史」
- 「原町市史」
- 「大高百年誌」大田原高校
- 「軍艦の最期」英和出版
- 「大空のサムライ」坂井三郎著 講談社
- 「きけわだつみのこえ」岩波書店

文芸部誌部門 最優秀賞

真岡女子高等学校 百色眼鏡



短歌部門 最優秀賞

真岡女子高等学校

溶け合わぬ白と緑の境目のアイデンティティとクリームソーダ
眼鏡越し曇る未来は不確定レンズ拭えどピントは合わず

俳句部門 最優秀賞

矢板中央高等学校

薫風や変わらぬ日々に感謝をす
あぜ道に前へ倣えの曼珠沙華
公式をまる飲みにする星月夜